

## ワークショップ「これからの里山利用」

龍谷大学政策学部講師・里山学研究センター3班班長  
谷垣 岳人

2014年11月22日-23日に龍谷大学深草学舎で開催された第10回大学間里山交流会では、新たな試みとして里山の価値について再確認し大学が里山での環境教育を展開する意義や大学間里山交流会を発展させるアイデアについて話し合う「里山ワークショップ」を実施した。以下にその概要を記す。

参加大学：金沢大学・東京大学・金城学院大学・滋賀県立大学・京都学園大学・京都女子大学・京都薬科大学・龍谷大学・近畿大学・兵庫県立大学

参加者：37名（大学生22名、教員15人）

ワークショップでは、同じ大学の学生・教員が重ならないように4名程度の班を作り5つのテーマについて、それぞれ10分程度話し合った。以下にテーマごとに出た意見やアイデアを教員と学生に分けておおよそ年齢順に並べて記す。

### テーマ1：あなたにとって里山とは何か？

**教員：**「日本のふるさと」かな？知らなかった日本の生態系！。龍大で色んな人とつながりを持つきっかけとなった自然。心の休まる場所・生き物と出会える場所。「龍谷の森」の保全から出発した研究対象の一つ・「人の手が入った自然」「文化としての自然」。緑のある（里）山だ。遊んだところ・お手伝いしたところ。子供の頃の遊び場。散策・癒やし空間。研究対象・興味深いところ・身近には感じていなかったがふるさとのイメージ。生まれた所、遊び暮らす→運動・研究する所→仕事する所。遊び場・職場。教育・研究・実践の場。水田・ため池。生業・生活の糧の場とするラボ（人材育成通じて）。わくわくさせてくれるすごいところ、この楽しさを子供の世代にも手渡したい。原風景。生活の近くにあるもの。

**大学生：**身近な自然・子供の頃も今は里山に住んでいる。景観を楽しむ場。日本の自然のあるべき形。子供時代に慣れ親しみ（昆虫採集・稲作・果物など）大学になり離れた場所。新しい自然（大学に来て知り、未だにはっきりとわからない）。安らぎをくれる場所、人が整備して恩恵を受ける場所。昆虫などを捕獲する場所・竹が生えている場所・遊ぶ場所。身近・遊ぶ・学ぶ。身近な自然・人と自然の関わり合い。田舎というイメージ・自然豊かな場所。のんびりするところ。子供の頃の原点・勉強の原点。子供の頃に母親と遊びに行った場所。自然とふれ合える場所。旅行で行ってよく遊んだところ。見慣れた風景→ゆえにおちつく風景。情景・いつかゴールするところ。虫が多い場所。人と生き物が共生・自然で昔の日本の風景・大切に残していきたい。

## テーマ2：里山の現代的価値とは何か？

**教員：**「これからの社会のあり方を考えるための場所」・素晴らしい所だよと子供に教える場。持続利用へうまく使うことと地域の人々をつなげる場・バイオマス利用。美しさを感じる、自然を相手に活動する楽しみを感じる場所。都市型里山：子供達を中心に身近な自然とふれあう大切な場所・地方の里山（中山間地の里山）：新しい活用の探求場所。緑をいじめられる（公共？）の場（所有者不詳）。食・エネルギーなど生きるために必要なもののことを考える。遠景としての存在・都市の環境保全・緩和。古くて新しいものの見方や生活の仕方を発見する意義（自然と人との共生など）。環境（生物のすみか・資源の生産）・文化のゆりかご・遊び場。都市型の生活で失われた精神と体のつながりを取り戻す場。身近に自然に接することができる学びと安らぎの場。人の話から学べる身近な場。心身の安心・安全を支える暮らしの保険。生産の場であり楽しみを提供する場、価値を高めるために楽しみ方を広めれば…。ほっこり、いやし、いこい。身近な自然体験、“恵（直接自然の恵みを得る場所）、生（生き物の生息場所）、繋（人と人、人と自然を生む場所、自然と自然のつながり）”。

**大学生：**人と自然が作った財産・里山の歴史と文化に価値があり今現在も続いているところ。授業での「話」として聞くだけでなく直接体験して学べる。自然と触れ合う価値。利用価値のある資源。人と自然が共存する場所・近代化した現在、忘れてはならないもの。ふるさと（癒やされる、安心できる場所、ほっとする）。観光地・林業などの雇用の場。休息地・景観・自然教育。資源・伝統・植物生態。生物の住むところ・子供がのびのびと遊べる。公園としての価値がある。生き物のすみか・観光・自然体験の場。日本らしさが残る場所→日本人が戻る場所。子供達が自然に触れやすい場所・里山教室。休息の場（自然体験とか）。都会にない魅力があるところ。昔のような生活と直結したものではないが、放置しておく訳にもいかないもの（無視をしてはいけない？）。これからの社会の一部（災害時の食糧庫にもなる）。かつての知識の宝庫。「自然を学ぶ」・「いやし」・環境教育。

## テーマ3：大学にとって里山の価値とは何か？

**教員：**若者を再教育する最高の場所だ→学外で授業をしよう。個別の研究を超える連携が必要となるのが面白いところ。都市生活から自然にふれ合える第一歩。①自然教育・環境教育、②地域への寄与：地域市民へ開放して住民のアメニティに資する、③大学人のアイデンティティの場、④里山間ネットワークで日本の自然保全。シティー boy脱却、やんちゃ（野生）をとりもどす場。文化・技術の伝承、地域とのつながり。人間形成の場・日本文化の伝承。利用（研究・教育・市民）する上で自由度が高い。生物・自然のことを学ぶ場→生きる力を育む場・文化の伝承をする場。ストレス軽減、生きる力を身につけるヒントになる場、出会いの場。自然やその恵みを知る、里山保全の砦。農耕文化と自然そのものとイメージの良さ。実践知の学びの場・人と自然の関わりを解明する研究フィールド。里山の活用と保全を学ぶ場→大学を出て、それを使ってほしい、生き物の楽しさや不思議さ文化のおもしろさに触れる機会。利活用の場：セラピー・たき火、IターンUターン就業：林業・農業。地域に根ざす方法・手段、地域の中の個人・組織として思想。

**大学生：**実習の場として活用できる、里山の活用・保全・利用、フィールド全てが学びの場である。授業などを通して伝える。自然の中で学ぶ自習場所・地域創生。大学が里山を持つことによって講義が生まれ学生への興味促進に繋がる、社会に一番近い自由な空間で考えること

ができる。学びの場・教室。座学で知ることのできない体験をさせてもらえる場所・発見がある場所。稀少種を実際に観察できる、教育の練習、学生に遊び場としての利用（木材）。学ぶ体験・“生きる”を知る。自然に関わることのなかった大学生にチャンスを与えている、新しい発見・出会い→抱える問題・生物の豊かさ。環境教育の場・散歩道・気分転換の場。学生の憩いとコミュニケーションの場・生きることの基本の確認の場。学生の将来の指標になる→里山の価値の共有。学生が里山を伝えること。研究場所（勉強場所・活動場所）。教室じゃない学べる場所。生徒にとって自らの知識と文化を学ぶ場所。学習・異文化交流できる非日常空間（都会っ子のメンタルヘルス）。今の異常な便利さを知る場（昔の苦勞）。研究対象。

#### テーマ4：持続可能な社会の形成に里山環境教育はどう答えるのか？

教員：「里山教育」をこれからの「教養教育」のかなめとしたい。①生物の多様性に気づく（面白い）、②里山問題に気づく、③持続可能利用に向けて地球環境の20世紀末から始まったフローの勉強。目の前にある「資源」に気づく、「持続可能」という問題自体に気づく。命のつながり、命の循環が社会の持続性の根本だということを里山（里山林）で知ることができる、多様性を平等に尊重することが、持続可能な社会の根本であることを知ることができる。「適度に」伐り続ければ「里山」は維持できる。身近な資源（食・エネルギー）を実際に使って、しんどさ、心細さ、うまい使い方があることを実感。資源利用：燃料使用・微気象緩和。持続可能とは、次世代の増産を考えること、想像力を育てること。自分が地球の一員であることを理解するのに最適の場・個人が動かせるシステムを作る、見せる。感じる心、工夫する頭脳、行動するからだを育むことをローカルな里山で実践できれば、グローバルな問題へも対応する力になる。里山は資源でもある木を切りすぎればなくなるが、適切な伐採は永遠“ほどほど”思想？ 再利用・無駄を省く、その場をしのぐ工夫。半栽培をキーワードに恵みを引き出す力をつける。都会と農村で意味が違う：農村→まず地域・村落の持続が大事。①里山教育は地域の人々が他所者の視点で地域を見る機会、それにより地域資源を自覚できる、②里山の楽しみ方を知る人を増やす。①②で地域の維持。NPO・企業・小学校も巻き込んで開かれた大学連続里山講座（体験）：〇〇大学で〇〇体験、〇〇講座、〇〇勉強会。地域（人と自然の組み合わせ）・里山は多様であることを知る、時代が変われば状況が変わることを知る、時と場の組み合わせ。

大学生：昔から続いてきた里山利用のシステムを見ることで持続可能な部分がわかる。できる限り自給自足。里山を広げ認識させ、活用保全することで持続可能にさせ逆に里山を作っていく。人と自然との関係を知ることができる。子供にとっては生き物・自然との触れ合い。一年を通して里山を自分たちで利用する。①荒れた里山の手入れ：育成・伐採、②里山の資源の利用：炭・ペレット・食料・再利用。①②から持続の大切さを体験する。里山を近くに感じる・知る教育→何に利用すればよいかは…。生きていくことを学ぶ→食べ物のありがたさ。エネルギー源として化石燃料以外のものも存在すると認識させられる。里山の田んぼで農業体験してみたら、里山が持続可能と分かる→今の社会はどうかと人に“気づき”を与える。今すぐできることを気づかせる、“持続可能社会”は身近であることを考えさせる。親から子へ知識を受け継げる場所（植物、リラックス、使い方）。地域の方や子供に「自然を残したい」と思ってもらえる。エネルギー利用の再考、仕組み確立の材料→もしくはかつて

のシステムの組み込み。自然との共生を教える→資源を大切にようになる。今では難しくなったがかつてのケース（持続可能社会）のようなもの。里山教育には種類が多く分かれている→本当に持続可能につながるのか？

#### テーマ5：大学間里山交流会をどう発展させればよいか？

教員：里山を大人と子供の遊び場に変えよう。学生を主体とする（企画委員会の設立、開かれた学会）、お互いに体験し合う、他大学の里山を学べるシステム。大学向け「WEBSITEの開設」・遠くから近くへ（大学間交流の前に大学周辺の地域資源の発掘・可視化：足下を固める）→CEPA。SATOYAMA INITIATIVEを使って発信。堅苦しい組織にはしたくない、各大学の活動の交流、相互の見方などができるとよい、情報提供ができるシステム。複数の大学から人を出して、企画委員会のようなものを組織し、継続的に毎年開催できるような工夫が必要では？研究者にとっても知的満足を得られるような場面が必要では？（学生と研究者が発表するようないわゆる「学会」の要素が一部分あったほうがよい）。学生は入れ替わるので持続可能な会。学生の国内留学（単位互換）、情報の総合整理、ツアー。日本の資源として捉え直す、日本文化の伝承地として評価・大学の自由の原点（何でもできる、想像力のある学生を育てる）。費用負担（学生）の軽減、より広く交流する→大学間里山コンソーシアム・募金・卒業後のOBとの交流。広報体制→大学外の人とも経験を共有→政策提案。山での活動の幅を広げるための実務のスタッフの交換プログラムとかどうでしょう？→やっぱり人材育成のような学生の交換プログラムかな？人があつての里山、若い人・次世代に里山の価値、考え方を提供する中心機関。共通利用施設化・専門家・学生の交流価値・地域をエンカレッジ。初参加、今までの活動同様に各大学の里山見学カリキュラムなどの情報交換で。小・中・高の先生方との連携とか。SNS活用。細々と続いていけば良いと思う、たまに全国・国際時代。

大学生：他大学が持つ里山フィールドで学べるようになれば多様な里山が見られるし体験できる、そのようなシステム作り。具体的な問題について討論する。里山のない大学でも学べるように農学部などを設けている大学でシンポジウムを開き呼びかける。ボランティア団体に里山を開放する。大学間里山交流会に参加することで、里山学のすすめ等の講義に加点されるシステムを作り、参加の絶対数を増やす。横のつながりの促進、里山マイスター導入等。自分たちの活動に対して、参加された方の意見（紙などに書いて）がほしい、ワークショップは続けてほしい。ポスター発表：団体活動に対して質問・アドバイスされる、一年に一回の発表の場。お互いの里山を訪れ合う、学生活動の場に。外部・内部関係なく、里山に関係した商品の販売し、里山に興味をもってもらう。様々な大学・学部生が学びやすい環境作り（継続的に）。大学が関わっている里山に訪問する参加者で良い点・改善点を話し合う。“文系学部生”を呼び込む。イベントなどの際に、お互い連絡できるようにする。自分らの地元の魅力分かっていない。里山でワークショップ、より多くの大学・学生の参加→里山ファン。様々な取り組みを体験し比較する。大学同士で体験し合う、もっと多くの学生が来て、いろんな人と話せるようにする。まず交流の場の維持、新しく参加する人に里山利用の多様性を学んでもらう、その上で何か全員で出来る活動の実施？あるいは、今回のような意見の交流や議論できる交流会を増やす（年一回から複数回へ）。大学生を主体にする。もっと広める。